

異文化理解の体験学習

豪州3か月語学研修と生徒による資料写真の撮影

桐陽高等学校 松本日出年

1. はじめに

「国際化時代」「国際化社会」などといわれるようになって久しいが、最近では海外で活躍する日本人スポーツ選手のニュースに一喜一憂し、スパーのレジには韓国語・ポルトガル語・アラビア語などの表示が見られるなど、「国際化」なるものを日常の中で実感する機会もずいぶんと多くなった。

こうした時代・社会に対応し活躍する人材の育成をめざした教育プログラムが全国で実施され、海外への修学旅行も珍しくなくなった。本校でも数年前から、全校生徒が海外で語学研修を行っている。期間や実施国は本校が設置している5つのコースによって様々であるが、今回は受験科目として地理を選択する生徒が多い国際進学コースにおける取り組みについてご紹介する。

2. 豪州3か月語学研修について

本校の国際進学コースは、1995年度からオーストラリアで語学研修を実施している。当初は1か月間であったが、1998年から3か月間のプログラムとなり、2年次に毎年35名前後が参加している。研修の概要は以下の通りである。

目的：英語力の向上

異文化理解
自己研鑽

期間：9月上旬から12月上旬

場所：オーストラリア クィンズランド州マルチドー市周辺（サンシャインコースト）

方法：原則1家庭1名のホームステイと現地の高等学校での授業

「国際化社会」の定義はいくつかあるが、ひとつには、異質な文化・価値観が接触する機会が多

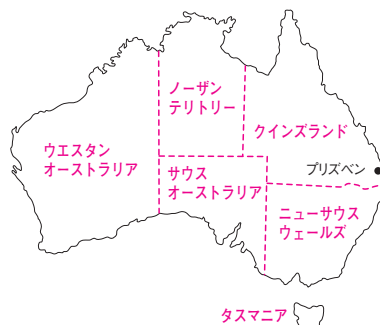


くなる社会であると定義することができる。そのような場合に少なからず生ずる「摩擦」をいかにして最小限に抑え、解消していくことができるかが、国際社会に生きる者にとって重要な資質であると考え、研修の目的が掲げられている。

研修方法については、可能な限り現地の生活に溶け込み、体験を通じて目的を達成できるよう生徒同士が分散する環境づくりに重点をおいている。

生徒を5～7の学校に振り分け、かつ、事前に判断した個々の英語力によって10年生と11年生（日本の高1・高2に相当）に分けて入学させるため、生徒によっては、定期的に集合するとき以外に、全く日本人と接触しなかったという者もいる。

研修中は日記の記録を義務づけ、1か月ごとの現地の生活レポートの提出と、帰国後にクリアファイル一冊分のレポートの作成を行っている。



事前準備としては、英語力の向上に最も力を入れている。研修目的のものでもあるが、一定の英語力をつけてから研

修に臨むことが、研修の成果をより大きくすることはもとより、トラブルを未然に防ぐうえで重要である。ちなみに国際進学コースでは英語の授業時間数が1年次に8単位、2年次に9単位、3年次に15単位確保されている。このうち6単位をオーラルコミュニケーションに費やし、さらに2年次には英語演習3単位を選択することができる。

この他、オーストラリアの自然や歴史・動植物などのグループ研究とそれらの文化祭での発表や、国際化が決して西洋化を意味しないことを踏まえて、浴衣の着付教室や能楽教室などの実施・参加を行っている。

研修を終えての生徒の感想は、自身の英語力不足の痛感から、今後の英語学習への傾注を誓うものが最も多く、その他、家族愛の大切さや日本の物質的豊かさとオーストラリアの心の豊かさを比較したものなども多い。

3. 地理の授業における取り組み

研修目的にあげられている異文化理解の方法として、地理的な見方・考え方が有効であることは論を待たず、学習指導要領でも、これにより「国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」としている。また逆に、日本と異なる風土の中で実際に生活する経験をもつことが、地理的な見方・考え方を大いに育てる機会ともなっており、研修を地理の授業に少しでも活かしたいとの思いから以下のような試みに取り組んでいる。

(1) 資料写真撮影のすすめ

教科書や資料集には資料写真が掲載され、最近ではメディアの発達により様々な写真や映像などの視聴覚教材を用いて異文化理解に成果をあげている授業例もたくさん報告されている。そこで本校の生徒には、せっかく語学研修によって異文化を五感で体験するわけであるから、一歩踏み込んで、生徒自身に写真を撮影させる試みを行っている。それに先立って日ごろの授業の中でも、普段

目にする資料写真について、「果たして同じ光景を目の前にしたとき、同様の写真を撮影しようとの意識が働くだろうか。」などと、単に資料として参照するだけでなく、撮影者としての意識を働かせる訓練をしている。

以下は、生徒が撮影した写真と、生徒による解説である。

(2) 事例その1



これは、ホスト宅前の道路である。外国は自動車が右側通行とのイメージがあったが、オーストラリアは日本と同じ左側通行であった。走っている車も日本製がとても多かった。イギリスが左側通行なので、その関係だと思う。オーストラリアは国内市場が小さく、工業があまり発展していないので、電化製品なども外国製（韓国製が多かった）が多い。日本車はもともと右ハンドルだということもあって、輸入が多いのではないかな。

それから、道路脇の溝にも注目してほしい。どの道路も日本のように側溝がきちんと整備されていない。この地域は日本と同じ温暖湿润気候だが、日本に比べて雨が少ないからだろう。実際、日本のような蒸し暑さはなくカラッとしているが、肌がかさかさになってしまい、リップクリームは欠かせなかった。

(3) 事例その2



この写真はブリズベン空港から北へ車で1時間ほどの研修実施地マルチドー市へ向かう途中で車窓から撮影したものである。雄大な景色が続く中で、何か違和感を感じ

たのでよく見ると、樹種・樹高が揃っており、方形に切り取られた様子から、これが人工林であり林業が行われていることが分かった。伐採された木は日本へ輸出されているとホストファーザーから聞かされた。帰国後の調べでは、以下の表のようにオーストラリア各地で植林事業が行われており、そのほとんどに日本の企業が出資していることが分かった。企業名から、おもに製紙業に利用されているようである。

植林事業は、地下水の上昇に伴う塩害の解消に貢献するものとしてウェスタンオーストラリア州政府から奨励されているプログラムや、現地への貢献が認められ、豪州土地環境貢献賞を受賞したプログラムなどもある。

おもな植林事業

	参加企業	地区
A	王子製紙、伊藤忠商事、千趣会、東北電力	ウェスタンオーストラリア州
B	日本製紙、三井物産	ウェスタンオーストラリア州
C	大阪ガス、三井物産	ウェスタンオーストラリア州
D	トヨタ自動車、三井物産	ヴィクトリア州 サウスオーストラリア州 ウェスタンオーストラリア州
E	日本製紙、三井物産	サウスオーストラリア州 ヴィクトリア州
F	丸紅、中国電力、ローム	サウスオーストラリア州 ヴィクトリア州
G	王子製紙、伊藤忠商事、講談社、電源開発	クインズランド州 ニューサウスウェールズ州
H	大昭和製紙、伊藤忠商事	ヴィクトリア州 ニューサウスウェールズ州
I	日本製紙、三井物産、Midway Ltd.	ヴィクトリア州
J	王子製紙、日商岩井、凸版印刷、北海道電力	ヴィクトリア州 サウスオーストラリア州
K	王子製紙、日商岩井、小学館、日本紙パルプ商事	ヴィクトリア州
L	小学館、日本製紙、三井物産	ヴィクトリア州
M	四国電力	ヴィクトリア州
N	三菱製紙、三菱商事、東京電力、Gunns Ltd.	タスマニア州

(4) 授業での発展

提出されたレポートをもとに、撮影者の発表と自由な意見交換のあとで、こちらから補足と修正を加えながら、各事象の必然性やメカニズムの理解に努めている。

事例その1からは、英連邦の一員でありながら、アジア諸国との連携に力を入れていることの必然

性や、同じ気候区でも大きな程度の差が存在することにみる、ケッペンの気候区の区分方法による簡便さと不完全さなどについて、事例その2からは、日本の木材輸入の歴史や現状、東南アジアでの問題、地球規模の環境問題などなど、かなり広い範囲にわたって意見交換ができた。

この他にも興味深いレポートがあり、いずれも写真というものの性質から、対象物に対する撮影者の意図・意識が如実に表れていて、実に面白い。また無意識のうちに捉えていたものを再発見する喜びもあった。

この試みはオーストラリアという地域の姿を捉えることが直接の目的ではないが、学習指導要領のいう地域の規模に応じた視点から考察するとい

う学習を、異国であり大陸であるオーストラリアについて、市町村規模（というよりもっとミクロな生活レベルの視点）から順に拡大して、しかも実感を伴いながら地域を理解できることも貴重な学習となっている。

4. おわりに

異国の地に行けば日本との違いが目について当然であるが、それに意識を向ける癖をつけることで、今まで同じに見えていた隣町との違いも見えるようになり、地理の面白さを認識した生徒も増えてきたように思う。正月におばあちゃん

んの家に行った折の食文化や習俗について、一所懸命私に地理的に説明し、意見を求める生徒もいた。

それにしても他の生徒がピースして記念写真を撮影している一方で、何の変哲もない、景色ともいえないものにカメラを向けて撮影している地理選択者の姿は奇異に映ったに違いない。